

第21講

小説(2) — 心情説明

要点整理

登場人物の心情を問う設問が心情説明問題である。小説は心情を中心に話が展開されることから、読解の中心は心情の把握に置かれる。その代表的な設問形式には次のようなものがある。

・傍線部「……」とあるが、この表現からうかがわれるの心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

・傍線部「……」とあるが、この時のの心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

◎解法のポイント

- ① たいいていの場合、問題文の前にストーリーへ入りやすくするために導入文が置かれている。それをもとに時代設定、登場人物の置かれている立場・状況や人物相互の関係などの土台となる設定をきちんと把握する。
 - ② 場面の展開をおさえながら、登場人物の心情がどのように推移しているかを把握する。その際、登場人物の心情を描写した箇所を見落とさないようにする。
 - ③ 選択肢を吟味する前に、登場人物の心情を端的に表現するとどうなるか、自分なりに考えておく〔不安〕〔喜び〕〔落胆〕など。選択肢では、心情説明の違いに留意し、自分が予想した心情との異同を確認する。
- 心情説明問題は、自分の先入観や登場人物に対する好悪の感情を入れて読んだり、深読みしたりせず、評論に対する読解と同様に、あくまでも問題文に根拠を求め、客観的に読み取れる範囲内で解答を出す。

演習問題 A

次の文章は、野呂邦暢『白桃』の一節で、戦後の食糧難の時代を背景としている。ある日、少年とその兄は、かつて父の使用人であった酒場の主人のところへ使いに呼ばれた。これを読んで、後の設問に答えよ。

秋であった。

医師は妹の肺炎にペニシリンがいてとつけた。金さえあれば解決することである。兄弟は包みをもたされて、それは九歳と十二歳の子供にもてるくらいの量だったが、店へやって来た。

主人はいつもの上機嫌で心得顔に二人をむかえ、包みをうけとって奥へ消えたまま出てこない。ついさつき、気むずかしい顔つきの男が呼ばれて奥へ去ったのも、包みにかかわりがあると思われて弟は不安だった。

「どうしたんでしょうねえ」

わずかな暇をみて女主人が奥へ去り、しばらくしてどると、二人のまえにおいてあった桃をとりあげて皮をむきはじめた。女主人はなにかいうのだからと顔をみつめても少年たちには黙っている。

奥で、なにかのつびきならぬことがおこったのかもしれない、と弟は想像した。女主人の細い指が器用にナイフをあやつって、手の中で桃をあたたかにも一つの毬のようにくるくるところがしながら皮をむくの彼は見ていた。皮は細い紐になってテーブルの上におちた。

皮をむかれた桃は、小暗い電灯の照明をやわらかに反射して皿の上にひっそりとのっている。汁液が果肉の表面にじみ出し、じわじわと微細な光の粒になって皿にしたたた。弟はテーブルから目をそむけた。

しかし、壁を見ても客の姿を見ても、目にかぶのは輝くばかりの桃である。淡い蜜色の冷たそうな果実は、目をとじてさえも鮮やかに彼の視界にひろがる。戦争以来、何年も見たことのない果実であった。

女主人は客のいるカウンターへ去った。

「帰ろうよ」

弟はささやいた。

「お金をもらったら帰る」

兄がおもおしく宣言した。弟の目には兄がおとなっぽく映った。自分ひとり乳のみ児のように道理をわきまえない子供だと思われ、それが肚だしくもあった。いったい兄は皿の桃をどう思っているのだろう。手をのばして触れたくもないのだろうか。大豆漬とうもろこしの雑炊を食べていて、どうして平然とおちつきはらっていられるのだろう。

弟はズボンのポケットに握りこぶしを入れ背をまるくしてうなだれた。兄はいう。

「おまえが小さいときは何でもあったのだよ。チョコレートもカスターラも。忘れたのかい、食べきれずにするほどだった」

いよいよ弟は背をまるくした。兄が嘘をついているとは思わなかったが、そんなことは一つもおぼえていなかった。たぶん事実だろうが、何でもあった昔を考えるのはつらかった。今は何もないのだから。

そのとき大きな手が兄弟のまえのテーブルをたたいた。二人は顔をあげた。酒場の主人がどきりと風呂敷包みを投げだしてせきばらいをした。

「見な、わしはやすやすとごまかされるそこのちんぴらとは違うんだよ。初めこの米を見たとき、なんとなく色つやが悪いと思ったな。明かりのせいかと思って奥の電灯でしらべてみた。念のためこの人に立ち合ってもらって飾にかけてみた」

「おれ、帰るからな」

立合人は兄弟を等分に見くらべてから店を出ていった。主人はふりむきもしなかった。

「飾にかけてみたらおどろいたよ。屑米と糠がたっぷり混ざってあるんだ。いいかね、おやじさんに頼んだのは鮎につかう上等の米だよ。これがつかえるかい。あんまりみくびつてもいいくないもんだ。そうとも、昔は社長のお世話になつたさ。だけどご恩返しはしたつもりだ。酒代だつてだいたまってるが、一度も催促なんかしやしない。要する

読解のポイント

(1) 二箇所の傍線部についてその心情の違いを尋ねたり、傍線部に至るまでの心情の推移を尋ねたりする設問もあるので注意が必要。

(2) 登場人物の心情を追う際には、まず、直接的な心情表現に着目する〔嬉しい〕〔悲しい〕〔腹立たしい〕など。つづいて、会話文や動作表現など心情が現れている言動に着目する〔例〕「……、私がもう一度言う、踊り子は赤くなって、非常に真面目な顔をしなから軽くうなずいた〔川端康成『伊豆の踊子』〕」↓はすかしさ。また、場合によっては自然描写などが手がかりになることもある。

(3) 選択肢を検討する際には、場面の展開や時間的な推移に従って心情の変化をたどる必要がある。誤りの選択肢の中には、場面的・時間的に後の部分の心情を説明したものが含まれていることがあるので、注意が必要である。

重要語句

◇上機嫌 たいへん機嫌のいいこと。

◇雑炊 野菜や魚介類などの具と飯を水と一緒に煮た食べ物。おじや。

◇平然 周囲の様子に動じない様子。平気な様子。

◇ちんぴら 下っぱのやくざ。不良少年。

◇鮎 金網などを底にして枠をつけた道具で、粒状の物をその大小によって分離するもの。

◇糠 玄米を精白する際に出る、薄皮の粉。

◇みくびる かなど。

にわたしのいいたいことはだ、社長ともあるう方がこんなけちなペテンをなさるとは残念なんだ。こう申しあげてくれ。
鯨につかえる上米ならいつでもしかるべき値段で引き取らせてもらいます、とね」

「おっさんよう、いい加減にしねえか、相手は子供だろ」

客の一人がカウンターから声をかけた。

「おっさん、だれだつて今は何かしらやらないと生きてゆけないんだよ。ペテンの一つがどうしたんだい、ええ、大損したわけでもないんだろ、それにあんた噂ではメチールでしこたま儲けたそうじゃねえか」

「うるさい、貴様にわしの気持ちかわかるもんか、うちの酒がまずかったらさっさと出てゆけ」

いきりたった主人のけんまくにおどろいて店じゅうの客が兄弟の方を見た。相手は子供だろ、といった男は口の中でなにかつぶやきながら主人から目をそむけた。弟は兄をふりあおいだ。兄は言葉もなくうなだれている。女主人がテールにひろげた米をつつみなおして主人に提案した。

「こちらのふつうの米だけでも引き取ってあげたら」

「おまえまでそんなことをいう、いや、この際は断固として……」

女主人は客の方へ去った。

二人は包みを抱きかかえて店を出た。月が空を明るくしていた。白い皿のようなそれは兄弟が店にいる間にのぼったらしい。

「ほら」

弟は兄のシャツを引いた。

「なんだよ」

とげとげしい返事に弟はあわてた。月の光が昼とはまったく異なる物の影を地上につくりだしているのに弟はおどろいたのだった。その異様な夜景に兄の注意をひこうところみて、彼はそくぎに黙りこんだ。今の兄が銀色の月に陶酔できるはずがない。

弟は身ぶるいした。空気はこのほか冷たかった。空腹のあまり胃が痛かった。手の包みが石でもかかえているように重たかった。

「どうしよう」

うって変わったように弱々しい兄の口調にかえって弟はおどろいた。

「どうしようって、仕方がないさ。帰ってお金はもらえなかったというさ」

「がっかりしたな。皆ぼくたちを見てたぜ、まあ何だな、出された桃は食べなかったしさ」

二人は道ばたに腰をおろした。弟は鼻をうごめかせ、いい匂いがする、とつぶやいた。

「木犀だよ、秋になると今ごろ匂うそうだ」

「おまえ、その木を見たのか」

「見ない」

「さがしてみよう」

通りはずでに明かりを消した家が多く、木犀の匂いは暗い路地の奥から歌うように流れてきた。兄弟は包みを水タンクのかげに隠して立ちあがった。弟が先に歩いた。まずきのう妹をはこんだ病院をさがし、それはすぐにみつかった、そこから家へもどる道すじを逆にたどって、初めてきのう木犀が匂った角で立ちどまった。

「おまえはむこうをさがせ、ぼくはこちを行ってみるよ、匂いのいちばん強い所が木犀の生えてるとこだ、花をもつて帰ろう」

弟はためらった。兄とはなれるのが今夜にかぎって心細かった。飢えた野犬が多く焼け跡をうろついていて、人を襲うこともきいていたからである。

「兄さんといっしょにその道を行って匂いがうすれたら逆もどりしてもいいんじゃない」

「それもそうだな」

弟は空腹を忘れた。月の光のもとで何かをさがすというのは秘密めいた昂奮をおぼえるものであり、店での屈辱を忘れることもでき、夜おそく戸外へ出た経験はなかったから、冒険の一種とも感じられた。

足がひとりでに軽くはずみ、二人はほとんど駆けるように家並みを縫って急いだ。匂いはあるときは鼻をうつほど強く、あるときはその場にたたずんで息をつめなければ感じられないほど稀薄になった。

二人は立ちどまった。匂いがそこで断ちきられたように消えている。弟は荒い呼吸をととのえ、深々と肺の奥まで夜気をすいこんだ。そうするとやはり木犀の匂いは微かに漂っているのがわかった。二人はあせった。

こうなったからにはどうしても木犀の木を発見しなければならない。家々にともっていた最後の灯が消えた。ずいぶん遠くまで来たように感じられる。

「ここはどこだろう」

兄の語尾がふるえていた。あたりの家並みはまったく見おぼえない。月の光をあびて黒々としずまりかえっている家は、うずくまった獣のかたちに似ていた。弟は夜の光が露わにしたこの異様な世界のたたずまいに酔った。

「え？」

「いや、何でもない」

と弟は口ごもった。目のまえに出現した夜景の珍しさを再び兄に語ろうとしかけて、そのとき自分の見ている物を兄もまた必ずしも見ているとは限らない、ととっさに理解したのである。彼は、え？ と応じた兄の口調に不安をいだちしか感じることができなかった。

(注) ペニシリン…抗生物質。

メチール…メチルアルコール。毒性が強く、飲む量によっては失明、死亡することがある。

◇ペテン…人をだますこと。いかさま。
◇しかるべき…適当な。ふさわしい。

◇しこたま…たくさん。どっさり。

◇けんまく…相手と争おうと激しくいきりたった態度。「剣幕」などと書く。

◇とげとげしい…話し方や表情などがいかに意地悪できつい様子。

◇陶酔…①気持ちよく酔うこと。②うつとりとその境地に浸ること。

◇身ぶるい…寒さや恐ろしさ、または勇みたったために体が震えること。

◇うって変わったように…前とがらりと変わって。

◇口調…話し方。語調。

◇木犀…モクセイ科の常緑樹。キンモクセイ・ギンモクセイ・ウスギモクセイの総称。花は甘い芳香を放つ。

◇屈辱…屈伏させられてはすかしめを受けること。

◇たたずむ…立ち止まり、じっと立っている。

◇夜気…①夜の冷たい空気。②静寂な夜の気配。

◇抗生物質…細菌の発生を抑制する作用、または制癌作用を持つ物質。黴や放線菌、細菌などからつくられるが、科学的に合成されるものもある。

○ 藤原部中の(心)の(心)を
展開から把握する。

問、二

る。
ウ 屈辱感にうちひしがれながらも、桃に手を出さず、毅然きぜんとした態度をとれたと思うことで自分を支えようとしている。
エ 取引に失敗した今、こんなことなら桃を食べればよかったと後悔しているが、弟の手前、負け惜しみを言っている。
オ 取引に不利になると思っ
て桃に手を出さなかったのだが、今はそれが酒場の主人への当てつけになったと考

ア 木犀は、弟だけでなく、酒場で大人っぽい態度をとっていた兄にも子どもらしい感情を取り戻させようとはあるが兄弟に解放感をもたらしめている。

イ かすかな匂いを頼りに探す木犀は、当初の目的である葉代のかわりとなるものであり、何かを強く望めばそれが手に入ることもあり得るといふ実感を兄弟に与えている。

ウ 木犀は、二人に酒場でのつらい体験を忘れさせ傷をいやしてくれる存在だったが、結果的には弟に兄の言動を見直させ、心情的に距離を生じさせる契機となっている。

エ 暗やみに香りを漂わす木犀は、兄弟をこれまで見たこともない世界へと誘い、木犀を探すという共通の目標によって、二人につかのまの一体感を抱かせている。

オ 木犀は、子どもたちの生き生きとした行動を誘発することによって、二人が大人社会の現実と直面する前半とは対照的な世界を作り出す要因となっている。

△心情説明を求める設問。とげとげしい返事をした兄が、急に弱々しい口調になったことから、兄の感情の起伏を読み取る。そしてこれをふまえて傍線部を検討する。桃を食べなかったことが、

◇当てつけはつきりとは言わずに何か
を見せたり聞かせたりすることによつ
て、相手を非難する気持ちを表すこと。
△内容説明を求める設問。桃や夜景に対
する兄と弟の受け止め方の違いを把握
する。

△本文全体の把握を問う設問。「説明として適当でないもの」である。間違えないように。本文は、兄弟が酒場でお金を得るためのやりとりを描いた前半と、二人が木犀の匂いに引かれて夜の町を歩き回る姿を描いた後半とから成る。木犀が二人にとつてどのような意味を持っているのかを理解する。